

1983年に退官された前田坦教授の後任を、1985年9月から1989年3月まで務められた杉浦正久先生は、2007年8月13日に逝去された。在任期間が短く、ご存知でない方も多いと思われるので、先生の人となりを紹介しておきたい。

杉浦先生は、1949年に東大理学部地球物理学科（永田武研究室）を卒業して大学院に進学、1952年からアラスカ大学(フェアバンクス)の S. Chapman 教授のもとで勉強され、1955年にアラスカ大学第1号の Ph.D を取得された。東大大学院時代(1950年)に日本地球電気磁気学会田中館賞を「電離層の遮蔽効果」という題で受賞され、Ph.D 取得後のアラスカ大学スタッフ時代には、Guggenheim Fellowship によってケンブリッジ大学に留学された。1962年からは NASA ゴダード飛行センター(メリ-ランド)で研究生を送り、この間にアメリカの市民権を得られた。



国際学会でも活躍され、国際地球電磁気学・超高層大気物理学協会(IAGA)第5部会長(1970年代)、執行委員(1980年代)を務められた。NASAの功績メダルを2回(1982, 1985)受賞され、アメリカ地球物理学連合(AGU)の Fellow にも選ばれておられる。

帰国後は、京大初の外国籍教授として地球電磁気学講座(今は太陽惑星系電磁気学講座)を担当し、地磁気世界資料解析センター(以下、地磁気センターと略す)長も兼任された。日本学術会議では、地球電磁気学研究連絡委員会委員長、地球物理学研究連絡委員会委員、情報学研究連絡委員会学術情報データ専門員会幹事を務められた。地球電磁気・地球惑星圏学会では評議員を務められ、長谷川永田賞(2004年)を受けられて、名誉会員(2006年)にもなられている。

杉浦先生の研究は多岐にわたるが、まとめて「地磁気擾乱と磁気圏磁場構造の研究」と言えるであろう。先生は、NASAの衛星による幾つかの磁気圏磁場観測プロジェクトに関われ、最後にはダイナミクスエクスプローラー衛星による磁気圏磁場観測を主任研究者として指揮された。帰国後は、この衛星のデータを使った研究を指導され、幾つかの学位論文が書かれている。また、二つの地磁気活動度指数、Dst 指数、AE(オーロラエレクトロジェット)指数を考案し、IGY(1957-58年)以降の算出を続けられた。長期の統計的解析にも使われる地磁気指数の算出には、厳密な quality check が必要であり、一定の質を保っての継続算出は容易ではない。杉浦先生は、自ら考案したものとは言え、この二つの地磁気指数の面倒な算出を、終生、監督・指導された。1978年以降の AE 指数と1985年以降の Dst 指数の算出・公表は、地磁気センターの故亀井豊永氏が担当し、能勢正仁氏に引き継がれている。1996年からは、両指数の Quick Look 版が準リアルタイムでセンターのウェブで公表されている。これらの指数は JGR だけでも年間100篇位の論文に使われており、日本の国際貢献として高い評価を得ている。

研究者を、研究論文を書くことに専念して、それ以外の仕事を避けるタイプと、研究の傍ら研究環境・体制の整備にも努めるタイプに分けるならば、地磁気指数継続算出からも判るように、杉浦先生は明らかに後者のタイプであった。上述の IAGA 第5部は、学問中心の1-4部と異なり、観測推進、

観測所整備，データの収集・流通，指数算出など，学問の基盤整備を議論する部であり，学問に集中したい研究者は関わりを避けたがる部でもあるが，杉浦先生は，常にこの部の活動に熱心に関与された。日本でも，地磁気観測体制整備，データベース構築，計算機ネットワークの整備などに力を注がれた。情報研連委ではデータベースの著作権問題に関心を持たれ，科学データベースの自由な利用が阻害されないよう努力された。

杉浦先生が渡米されたのは戦後 7 年目で，日本は貧しく外国では敗戦国として扱われ，留学などは考えられない時代であったと思われる。そのような時に，アメリカに渡られた先生の決意・実行力と先見性に強い敬意の念を抱く。同時に，先生のご逝去は，日本人が「戦争による荒廃からの復興」という目標と「今は貧しくても，いずれ良くなる」という希望を共有できた幸せな一つの大きな時代が過ぎ去ったことを象徴しているように思え，一入，感慨深い。

余談 1 . 1985 年当時，外国人の教授就任は既に認められていたが，センター長のような管理職に就くことには，「公権力の行使」に絡んで問題があった。そこで，地磁気センター創設時（1978 年）の文部省担当課（学術国際局大学図書館課：後の学術情報課）課長として面識のあった遠山敦子氏（当時は高等教育局企画課長；後の文部科学大臣）に杉浦先生と一緒に相談に行った。遠山氏は，「管理職手当てがついているか」と質問され，「ついていないなら問題ないのではないか」と言われた。つまり，行使する公権力の大きさによって裁量の余地があるという判断であり，これにより，杉浦先生のセンター長就任が実現した。この時，遠山氏は，「今，文部省は，大変大きなことを考えているのですよ。」と漏らされた。後になって考えると，これは，1990 年代前半の「大学院重点化」ではなかったかと思う。

余談 2 . 1987 年に「日本地球電気磁気学会」は，名称変更問題でもめた。研究対象領域の拡大に対応した新しい名前にしようとする意見と伝統的名称を守ろうとする意見とが鋭く対立し，学会分裂かと思わせる事態になった。この時，杉浦先生は積極的に発言されて「地球電磁気・地球惑星圏学会」という名を提案され，分裂を回避することが出来た。2001 年，私の学会長時代に再び学会名変更が提起され，緊張して慎重に事に当たった。予想通り熱い議論になったが，学会の将来構想を考えながら，当面は現学会名を続けることで収めることが出来た。

余談 3 . IAGA の Secretary General を務められた故福島直東大教授が，もっと多くの日本人が第 5 部に参加しないと，自らは基盤整備に貢献せずに整備された部分は利用するとみられ，「日本ただ乗り論」が起こると警告されたことがあった。地磁気センターは，前田坦先生以来，この部に深くコミットしてきた例外的存在であり，前期(2003-07 年)には，家森俊彦現センター長が部長を務められた。

余談 4 . 1991 年の IUGG (ウイーン) に私は杉浦先生と一緒に参加した。先生は，正規のセッションの後，午後 7 時 10 時の時間帯に開かれる第 5 部関係のすべての Informal /Business meeting に出席して発言された。時差に弱い私は，関係の薄いものを適当にさぼって早く寝たかったが，10 才も年上の先生が連日出席されるのに付き合わざるを得なかった。

余談 5 . 杉浦先生は，NASA の SPAN (Space Physics Analysis Network) への日本からの接続に努力され，1987 年 9 月に，地磁気センターが KDD の公衆回線 Venus-P により結ばれ，e-mail の便利さを初めて知ることになった。この時も亀井豊永氏が活躍した。インターネットの普及が始まるのは，学術情報センター(NACSIS)の TCP/IP 回線が公開された 1992 年 4 月からである。

余談 6 . 私は，1964 年夏に同志社大学アラスカ学術調査隊に参加して，アラスカ大学とナベスナ氷河

地帯(アラスカ中央部)に2ヶ月余り滞在した。北村泰一副隊長(当時,同志社大,後に九大)に誘って頂いたからであった。アラスカ大学では,杉浦先生はNASAに移られた後であり,赤祖父俊一氏と吉田セキ子氏(名大)に世話になった。公定レート360円のドルは実際には370円位しており,持ち出しが300\$位に制限されていた。貨物船でサンフランシスコに着き,シアトル,アンカレッジ,フェアバンクスと移動したが,日本車は1台も見ず,帰り道の田舎のパーキングロットで,わずかに一台,トヨペットクラウンを発見した。日本では大きな高級車と思っていたクラウンが,アメリカの大型車の中で,まるで軽自動車のように小さく,しおらしく見えてショックを受けた。サンフランシスコでは,「日本にはマッカーサーの銅像があるか」と聞かれ,戦争ごっこをしていたアラスカの子供は,鉄砲を構えて「ジャップ」と叫びながら追いかけてきた。氷河まで運んでくれた小型機のブッシュパイロットは「日本の戦闘機と戦った」と言っていた。清潔なアメリカの町に比べて,日本はどこも薄汚いと思えた。杉浦先生が渡米された1952当時の日米の格差は,遙かに大きかっただろうと想像される。

余談7. 外国生活の長かった杉浦先生が京都にどのような印象を持たれるか興味があった。先生は,「京都は良い町ですね。こんな都市は世界のどこにもありませんよ。大事にしなければいけませんね」と言われた。

荒木 徹